

日本語ギョーカイの皆さんへの、「理系社会学者」からのラブコール

(雑誌『日本語学』2004年11月号掲載)

041101 著作権保持 Yoshio SAKURAI

sakurai.yoshio@nifty.com

<http://homepage3.nifty.com/sakuraiyoshio/>

桜井芳生 (社会学者)

私は、**ダーウィン生物学**や**ゲーム理論**など、いわば「理科系」の現代の知的営為の成果をふまえて、社会学ができないかと試行している社会学者である (出身は純「文系」)。こんなへんなスタンスで、日頃人間社会について研究しているせいか、いわゆる「文系」の教育者・研究者・大学院生などと交流すると非常におおきな逆カルチュラルショックとでもいうような感覚を感じることが多い。その言語化をここではおこなうことで、「日本語ギョーカイ」の皆様へ、私からのささやかな認識利得と、今後の**コラボレーションへのラブコール**の提供をこころみたい。

(チョムスキー派やピンカーの読者などの例外を除くと) 日本語業界の多くのかたは、近年自然科学で生じているヒトをめぐる知的革命ともいえる知的達成に非常に関心が薄い・知識が乏しいと感じられる。私見では、今日ヒトのコミュニケーションを探求するうえで、非協力ゲーム論・非対称情報の経済学における「1. **シグナリングゲーム**」「2. **チープトークモデル** (クチサキコトバのモデル)」、ダーウィン生物学⇔進化心理学における「3. **ダンバーのコミュニケーション=毛づくろい説**」「4. **ミラーらの、ハンディキャップ原理=適応度指標の見せびらかしとしてのコミュニケーション行動論**」、この四つの理説は「必須」である。(ただし、4は、論理的には、1の特殊例であることが近年知られるようになった)。このうちの一つも視野にない方が少なくないようである。

これと関連して、**異「種」間比較**、**異「行動」間比較**、の視点が乏しいことも、理系社会学者としては、とても気になる。ヒトにおけるコミュニケーションとよびうる行動を他の生物の類似の行動との比較におとしその異同をはかる。同様に、コミュニケーションと呼びうる行動をヒトの他の類似の・**あるいは一見すると全く異なった**、行動との比較におとしその異同をはかる。このような方向は非常に有望だとおもうが、あまり好まれない。この戦略にとって、生物学とゲーム論が有効でありそうなのはいうまでもないだろう。

さらに関連して、**日本語・国語・母語 (母方言も含む) にたいする親密性 (愛着) に無自覚的でありすぎる人も**少なくないような気がする。なぜ、ヒトという動物が母語 (というより母方言) に愛着を感じるかについて、ダーウィン生物学は強力な説明を提供している (ダンバー、ネトル)。愛着を感じるのは、もちろん各人の自由だ。が、それへの無自覚が、上記の「異種」「異行動」間比較への忌避 (**「わたしたちのコトバは、カクベツだ!**」) へとつながっているのではないだろうか。

手前味噌で恐縮だが、上記のアプローチの一例として、**柳田國男の方言圏論、方言変異現象、などが、ブルデューのハビトゥス論、近年の若者のヘンな流行現象などと強い通底性をもつ**ことを論じてみた。ご笑覧いただけると幸いである。いうまでもなく、コミュニケーション現象を異種・異行動間で比較するというこのような方途は一人の研究者の手には余る。日本語学の専門家みなさんに対しても、**日本語学界の「学界内尺度」からしても「得点」となるような、ヒントを提供できると確信している**。ひろく、**知的協業**をお誘いしたい！。

【関連文献】 数理社会学会『社会を"モデル"でみる』勁草書房。(シグナリングゲーム、チープトークモデルなど)

ロビン・ダンバー『ことばの起源—猿の毛づくろい、人のゴシップ』青土社

ジェフリー・F.ミラー『恋人選びの心—性淘汰と人間性の進化 (1) (2)』岩波書店

桜井芳生「ハビトゥス変異とシグナリングのダーウィニアン社会学・序説—方言変異・変な流行・ハビトゥス論懷疑から、パスワード改訂仮説へ」拙ホームページ所収

<http://homepage3.nifty.com/sakuraiyoshio/>

sakurai.yoshio@nifty.com